



第68回

6割が1カ月に1冊も本を読まない

※2024年9月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

月に1冊も本を読まない人が6割超に上がることが、文化庁が9月17日に公表した2023年度の「国語に関する世論調査」で判明した。同じ調査項目が設けられた08年度以降では最も多く、初めて5割を超えた。スマートフォンやネット交流サービス（SNS）の普及が原因とみられ、文化庁の担当者「活字離れを顕著に示しており、国語力の養成に影響が出かねない」と危機感を示している。

調査は24年1～3月、全国の16歳以上の個人6000人を抽出して郵便投票で実施。59・3%にあたる3559人から有効回答を得た。

1カ月に読む本の冊数を尋ねる質問は08年度以降、5年ごとに実

施。23年度調査で漫画・雑誌を除く書籍（電子書籍含む）を「1冊も読まない」と回答したのは62・6%で、18年度の前回（47・3%）から15・3%増えた。過去4回の調査はいずれも46～47%台で、急速に増えた。

「1冊以上読む」は36・9%で、前回（52・6%）より15・7%減少。冊数の内訳は「1、2冊」が27・6%、「3、4冊」が6・0%、「5冊以上」が1・5%と続いた。

性別で見ると「0冊」に男女の差はほとんどなかった。年代別の分析ではいずれの年代でも男女問わず「0冊」が最多となるなど、年代や地域によらず本を読まない人の割合は高かった。一方で、本を読まないと回答した人にインター

ネットの記事などを読む頻度を尋ねる項目では「ほぼ毎日」との回答が73・5%と最多だった。文化庁は「活字離れとは言い切れない」との見方を示す。

なぜ本を読む人は減っているのか。調査結果を詳しく見ると、その要因を推測することができる。

まず、「読書量が以前と比べ減っている」と回答した人は69・1%に上り、前回（18年度）の調査から1・8%増加。同じ質問項目のある08年以降では最も多かった。これに対し、読書量が増えた人は5・5%にとどまり、08年度以降では最少だった。

読書量が減少した人に理由を複数回答で尋ねると、「スマートフォンやタブレットなどに時間が取られる」との回答が43・6%で最も多く、「仕事・勉強が忙しくて読む時間がない」が38・9%と続いた。これまでの調査では「仕事・勉強で多忙」がトップだったが、23年度調査では「スマホ・タブレ

ットなど」が減少要因として初めてトップに浮上した。

その傾向は若い世代で顕著だ。理由を年代別に見ると、10〜20代は読書量減少の要因として「スマホ・タブレットなど」を挙げた人が最も多いが、30〜50代では「仕事・勉強」が最多。60代以上になると視力低下など健康上の理由を挙げる人が増え、70代ではトップになっている。

つまり、どの世代でもすべからず読書離れが進む中、若い世代ではスマホ・タブレットが本に取って代わり、中高年は仕事や視力低下によって本から遠ざかっている、という構図が見てとれる。

さらに踏み込んで要因を分析するのは、「なぜ働いていると本を読めなくなってしまうのか」（集英社新書）の著者で文芸評論家の三宅香帆さんだ。「読書離れの原因は、日本人の『長文離れ』というべき現象が起きていることだと考えられる」と指摘する。

三宅さんは「長文を読めなくなっている人が増えているのではないか」と推測。背景として情報環境の二つの変化を挙げる。

一つ目は「TikTok（ティックトック）」に代表される、「ショート動画」を投稿するSNSの普及だ。15秒ほどの短い動画を投稿するSNSがここ5年ほどで爆発的に広がり、「以前であればスマホで長文を読んでいた人も、スマホで動画や画像に時間を使うことが増えた」とみる。

二つ目として挙げるのはSNS特有の文章への慣れだ。「SNSの文章は短文で、文脈のない細切れな語彙が中心」との見方を示し、「長い文章を読むことは、自分から遠い場所への読解力や想像力を必要とし、自分にとってはノイズ（感心のない情報）となる知識も提供される。自分から遠く、ノイズとなる文脈を忌避している人が多いのではないか」と指摘した。